

ウィーン少年合唱団と出会って「歌」が自分の中に芽生えました

～横山だいすけさんインタビュー～

NHK Eテレ『おかあさんといっしょ』の「うたのお兄さん」としておなじみの横山だいすけさん。全国の子どもたちに歌と笑顔を届けている横山さんの原点が、幼いころに観たウィーン少年合唱団の映画だったそうです。さっそくお話をうかがってきました。

(インタビュアー:原典子)

—— 映画『青きドナウ』(1962年ウォルト・ディズニー製作)が、横山さんとウィーン少年合唱団との出会いだっただけですね。

音楽が好きで、レンタルビデオ屋さんで『青きドナウ』を借りてきて、観せてくれたのが最初でした。そのとき僕は3～4歳でしたが、目をキラキラ輝かせて「僕もこの合唱団に入る!」と言ったそうです。それからというもの、小学3年生で地元の合唱団に入るまでずっと観ていましたね。あまりに何度もビデオ屋さんで借りに行くので、お店の人に覚えてもらったりして(笑)。

—— 少年たちのどんなところに惹かれたのでしょうか?

自分よりもちょっと年上のお兄さんたちが、すごくきれいな声で歌っている姿を見て、「一緒に歌いたい!」という思いがどんどん強くなっていきました。彼らの透き通った歌声を聴いていると、なにかすごいものに触れているような気持ちになったのを覚えています。これが僕にとって、「歌」というものが自分の中に芽生えたいちばん最初の体験でしたね。もちろん普段から童謡なども歌っていましたが、それらは日常生活に近いもの。一方で、少年たちの歌はそこから離れた世界のもの、ちょっと特別なものとして捉えていたように思います。

—— ほんとうに夢中だったんですね。

ええもう、今でも一つひとつのシーンまではっきり覚えています。とくに主人公のトニー少年が《野ばら》(ウェルナー作曲)をオーディションで歌うシーンと、優等生のピーター少年とトニー少年が《菩提樹》(シューベルト作曲)を音楽室で歌うシーンは大好きで、いつもビデオを巻き戻して繰り返し観ていました。ひょうきん者のフリーデル少年が面白い顔をするので自分もやってみたり。枕投げをして怒られるシーンがあるのですが、それも真似しましたね。思えばあの映画が、「外国の文化」というものに触れた最初の体験でもあったのかもしれない。

—— 来日公演にもいらっちゃったとか。

一度だけ、小学生のときに連れて行ってもらいました。それも忘れられない思い出ですね。会場でCDを買ってもらっ

て、何度も何度も聴いていました。

—— 子どものころの記憶が、そのとき聴いていた音楽と一緒に心に焼き付いているのでしょうか。

《野ばら》や《菩提樹》を聴くと、その当時の思い出が鮮明によみがえってきます。母と一緒に歌ったこと

や、そのときの気持ち、居間の雰囲気まで……。『おかあさんといっしょ』を観ている子どもたちも、大きくなってから歌と一緒にそのときの自分のことを思い出してくれたら嬉しいですね。親御さんも歌を聴いて、「あのとき、あなたはこうだったのよ」と教えてあげたりすれば、親子の会話ははずむでしょうし。そうやって心のどこかに残るような曲を提供することができたらいいなあと、日々がんばっています。

—— 音楽は子どもの心にどんな影響をもたらすと思いますか?

僕は高校生のとき、図書館で「音楽が子どもの心を豊かにする」という内容の資料を読んで「うたのお兄さん」を志したのですが、実際の効果というのはすぐに分かるものではありません。けれど毎日子どもたちと一緒に歌うなかで、思いっきりはしゃいでいる笑顔や、リズムに合わせて身体を揺らしている姿を見ると、「ちゃんと届いているな」って思うんです。スタジオではじっと動かなかった子も、帰り道で「お母さん、楽しかったね」と言ってくれたりするそうです。そういうとき、「音楽の力」の大きさを感じますね。僕がウィーン少年合唱団と出会って、歌だけでなく彼らの生き生きとした表情から多くのものを受け取ったのと同じく、『おかあさんといっしょ』でも表情や歌詞まで大切にしながら歌を届けていきたいと思っています。



横山だいすけ

(よこやま・だいすけ)

NHK『おかあさんといっしょ』11代目うたのお兄さん。小学校3年から大学卒業まで合唱団に所属。国立音楽大学音楽科卒業。劇団四季を経て、2008年4月より11代目のうたのお兄さんに。

原典子(はら・のりこ)

音楽に関する雑誌や本の編集者・ライター。上智大学文学部新聞学科卒業。音楽之友社『レコード芸術』編集部、音楽出版社『CDジャーナル』副編集長を経て、現在はフリーランス。音楽雑誌等への執筆のほか、坂本龍一監督の音楽全集『commons: schola』の編集を担当。鎌倉で1歳児の子育て中。